

京都移転に際して

相澤 香緒里

(PEACE ON 事務局長)

このたびの決心について、驚かれたかたもあるかと思います。ご協力くださる機会の多かった東京圏のかたがたはなおのこと。応援して下さるかたは全国に広がっているとはいえ、拠点を東京に構えてこれまで活動してきたのに…という思いは私達としても大きく、悩み抜いた上でようやく決めることができました。

ピースオンとしては、今年度初めに「主要事業の1年休止」をうたい、活動の長期的展望をこれまで以上に模索いたしました。その中で、前々からおぼろげに思っていた移住の想いとピースオンの長期的展望が出逢う地点に達したのです。

* * * * *

私達はこれまで、戦争と混乱によって生まれ育った土地を追われたイラクの人々、暮らし＝文化を奪われたイラクの人々と数多く接してきました。ふつうの生活、ふつうの生き様を戦争のせいで変えねばならない人々に寄り添い、その困難を日本に伝え、ピースオン事業を展開すべく奔走いたしました。

その中で、それは自らにも跳ね返るのです。「では私は一体何を選擇してどのように生きているのか」。土地や人とのつながりを断ち切られた苦しみについて真に考え理解しようと突き詰めれば突き詰めるほど、自分の足元、自

分の環境を見つめ直すよりありませんでした。

まず何よりも私自身が、生まれ育った場所＝京都でその風土や風習といたいになり土地や人とのつながりの中で生活すること。机上の言論空間ではなく身体で実行すること。代表相澤恭行の「人間の盾」体験をはじめ、五感を通しての実践を大切にしてきたピースオンだからこそその決断です。

この姿勢は、昨年度から始めた農園体験からも学びました。白菜やトマトといった食品＝商品を摂取して生存するのではない、土が恵んでくれたいのちそのものを頂戴して己の生を続けられる有難さ。頭では分かっている、腹から得心できたのは、実際に身体を動かしたの体感からです。先祖や家族や友人とのつながりだけでなく土地(環境)とのつながりも人間にとって必要不可欠であると。

それらのつながりが絶たれつつあるからこそ、イラクの人々は困窮し日本でも多くの問題に直面するのでしょう。そのつながりを取り戻すことに、イラクでも日本でも努めてまいりつもりです。

* * * * *

(会報『PEACE ON JUNCTION』7号より一部編集、抜粋しました)

—